

難治性疾患克服研究の対象となっている 1 2 3 疾患について

主任研究者； 小澤敬也

疾 患 名； 自己免疫性溶血性貧血

1. 初代研究班発足から現在までの間の研究成果について（特定疾患の研究班が独自に解明・開発し、本研究事業として公表したもの。なお、原則他の研究事業等に依存していないもの。）

（１）原因究明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	該当なし		
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

（２）発生機序の解明について（画期的又は著しく成果のあったもの）

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考
1	1997 溝口秀昭	自己抗体の Rh 血液型特異性の証明	
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

（３）治療法（予防法を含む）の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期 及び 班長名（当時）	内容	備考

1	該当なし		
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1	1981 内野治人	副腎皮質ステロイド薬を第1選択とした治療プロトコルによる有用性の評価	
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

ウ その他根本治療の開発についてもの

	時期 及び 班長名(当時)	内容	備考
1	該当なし		
2			
3			

他の研究事業の成果と分かち難い場合は、備考欄に「合」と記載し理由を付記。

2. 「1」以外で、国内、国外を問わず、研究成果の現在の主な状況について

(1) 原因究明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

時期	内容	文献

1	該当なし		
2			
3			

(2) 発生機序の解明について(画期的又は著しく成果のあったもの)

	時期	内容	文献
1	該当なし		
2			
3			

(3) 治療法(予防法を含む)の開発について

ア 発症を予防し、効果があったもの

	時期	内容	文献
1	該当なし		
2			
3			

イ 完治に至らしめることはできないが、進行を阻止し、効果があったもの

	時期	内容	文献

1	1960 年 代以降	ステロイド薬の効果の評価	多数あり
2	1970 年 代以降	細胞障害性免疫抑制薬および摘 脾術の有効性評価	多数あり
3	2004	慢性特発性寒冷凝集素症に対す る抗 CD20 抗体の有効性	Berentsen S, et al., Rituximab for primary chronic cold agglutinin disease. Blood 103,2925, 2004

ウ その他根本治療の開発についてもの

	時期	内容	文献
1	該当な し		
2			
3			

3. 現時点において、次の事項について残された主要な課題及び今後の研究スケジュールについて

(1) 原因の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究 スケジュール
1	自己免疫現象の原因一般と通じる問題である	統一的な解明 にはまだ課題 が多い。	
2			
3			

(2) 発生機序の解明について

	課 題	解決の可能性	今後の研究 スケジュール

1	抗赤血球自己抗体の産生機序	自己抗体・自己免疫の成立一般と関連する	R h 血液型抗原の詳細解析とミモトープ形成と抗原認識機序
2			
3			

(3) 治療法 (予防法を含む) の開発

	課 題	解決の可能性	今後の研究スケジュール
1	自己抗体産生細胞の特異的抑制	不明	病態発生の究明を優先する
2			
3			

4 . 重症化防止対策について

大多数の患者に対して外来通院によって症状のコントロールが可能な治療法 (重症化防止のための治療法) の確立

	重症化防止のための治療法確立について解決すべき課題	5年以内に解決できる可能性	解決不可能な場合の理由	左記理由を解決していくスケジュール
1	ステロイド薬を凌ぐ優れた免疫抑制薬の開発	不明	病態に特異性の高い治療法が開発が待たれる	
2	抗 CD20 抗体による抗体産生細胞の抑制作用の本症への有効性の確認と位置づけ	ステロイド不応例・難治例への適用を考慮		前方視共同研究の取り組み
3				